日本精神神経学会百年史編集委員会　編

## 『日本精神神経学会百年史』

一九〇二年（明治三五年）四月四日午前八時、会頭三浦謹之助開会の辞をのべ、一瀉千里の勢いで会則審議をおえて演説にうつったとき、呉秀三の主唱による日本神経学会が成立した。呉―三浦の主幹時代につづき、一九三五年（昭和一〇年）に日本精神神経学会と改称し、長老支配から実力者教授支配の時代にはいる（いわゆる「新潟革命」）。一九四四年・四五年の総会は中止。一九四七年（昭和二二年）社団法人となる。一九五四年の総会で、評議員選挙民主化の方向がうちだされた。おなじ頃に神経学部門分離の動きがはじまり、一九六〇年に日本臨床神経学会が設立され、一九六三年日本神経学会と改称。暫定的とされた日本精神神経学会の名称はそのままだが、実質的には精神医学部門だけになった。一九六四年―六五年には、精神衛生法改悪反対―全面改正促進の運動にとりくむなかで、中堅層が力をつけてきた。

そして、医局講座制および精神病院のふるい体質のするどい批判の勢いをうけて、一九六九年の金沢総会は、学術発表をとりやめて、認定医制度を推進しようとした理事会を不信任した。その後は激動期で、保安処分制度、精神保健指定医制度などなど体制的なものへの反対決議をかさね、旧体制批判勢力内のグループ対立もあって、一九七六年には総会が開催できなかった。一九七八年からは学会運営もほぼ軌道にのってき、総会での教育講演がふえるとともにわかい会員の参加もふえてきた。創立一〇〇周年をむかえる二〇〇二年（平成一四年）には、第九八回総会と同時に第一二回世界精神医学会横浜大会を開催し、「精神分裂病」を「統合失調症」と呼称変更すること、また精神科専門医をもうけることを決議した。

ごくごく大筋だけをぬきだしてもまさに波瀾万丈の一〇〇年で、この一〇〇年をまとめた『百年史』はおもい（『日本眼科学会百周年記念誌』にはおよばないが、重量約三キログラムに達する）。全二冊のうち本編は、「日本精神神経学会創立百周年記念行事」、「日本精神神経学会の歩み」（沿革、総会史、機関誌史、理事会・評議員会・委員会活動、会則、役員、座談会）、「先達の足跡」、「理事長時代の思い出」、「トピックス」、「総会印象記」、「事務局の思い出」、「写真でみるあゆみ」、「年表」などからなる。資料編は、本会に関するもののほかに、大学精神医学教室沿革、地方会沿革、関連学会沿革、関連団体沿革などをおさめるほかに、総目次および精選四九論文をいれたCD-ROMがついている。これらのなかで、機関誌史が一九三五年までの『神経学雑誌』だけにおわっていることは、なんとも残念である。

金沢学会以降の激動はどういうもので、その意義はどこにあったか？　委員会活動では、論議の焦点であった、精神障害者と触法行為、精神保健福祉法、研究と倫理、精神科リハビリテーション、認定医制度がとりあげられており、総会史、

理事会・評議員会史とあわせよむと、ある程度わかってくる。座談会でも、金沢学会の意義が論じられている。ただ、最激動期におけるグループ抗争（それぞれのグループは学会員が構成しているとはいえ、グループ自体は学会外のものであった）の実態は充分にはみえてこない。教室史でも、教室内の抗争にはほとんどふれていないものもある。こういった不満はのこるが、あの激動の意義はもうすこし時間をおかないと、全体をつかみきれないのかもしれない。わたし個人は金沢学会で理事にえらばれたが激動についていけず、一期だけで身をひき、あとはすこし距離をおいて学会をみつめてきた。その印象では、ことばだけがはなばなしくなりすぎていた。精神保健指定医反対の集会決議をしておきながら、今の学会員のほとんどが指定医になっているらしいことは、その最たるものである。

さて、この『百年史』の完成は山口成良委員長のたいへんな努力によるところがおおきかった。山口委員長を補佐する立場になったわたしは、『日本医史学会総会百回記念誌』の編集に関与した経験をいかして、「先達の足跡」、「トピックス」などの企画を提案し、記念誌の内容を多彩にすることができた。といっても、できあがったものに不満がのこり、いくつかの欠陥が目につく。というのは、二〇〇三年五月の第九九回総会に間にあわせようと製作をいそいで、あつまった原稿を編集委員会で点検する時間がなかったのである。そのために重大な欠陥が生じた。

その第一は、引用されている図の出典がほとんどあげられていない点である。またいくつかの歴史叙述は、引用文献がしるされぬままに、かたよったものになっている。重要な資料提供への謝辞も、充分にのべられていない。こういった点は、学術論文ならゆるされぬことだろう。

つぎに目だつのは、「権威者」によるあやまった歴史叙述である。一〇〇周年記念行事として記念シンポジウム「わが国における精神医学・医療の歴史と展望―二一世紀における精神神経学会の新たなる展開を目指して―」がおこなわれた。その冒頭が大長老秋元波留夫による「日本精神神経学会創立の歴史的意義とその理念のその後の展開」である。そこで演者は、一九三五年の学会名称変更など改革の背景の一つには「それまで内科学の一分野であった臨床神経学が神経内科として独立する機運がたかま」ったことがある、とのべている。おなじ秋元がかいている一九三五年第三四回総会の印象記には、「これまで内科学の一分野であった臨床神経学が神経内科として独立するようになり、それ独自の学会として日本神経学会創立の機運が高まったからである」とかいている。つまり秋元は、一九三五年の出来事と一九六〇年の出来事（秋元の理事長就任直前の）とを混同しているのである。超高齢の演者によるものとはいえ、こういった間違いが学会の記念行事でのべられ、それが記念誌のはじめをかざっているのは、なんともはずかしく、またなげかわしい。ここでは、秋元をせめるよりは、大長老には挨拶だけをお願いして、具体的歴

史はそれにくわしい人にまかせることをしなかった企画に問題があるのだろう。同様におおきな（ときには滑稽ともいうべき）誤りは、もっと年下の人のものにもみられる。

こういう人選をみるにつけ、金沢学会で理事会不信任というはげしい改革手段さえとった日本精神神経学会が、「長老―高位者」偏重という（同時に、歴史研究の独自性をみとめず、学問よりは儀式・お祭りを重視する）風潮をすてていないことがはっきりみてとれる。

これらのほかに目だつのは、重要な人名の誤記である。理事長挨拶では、社団法人になって最初の理事長である内村祐之を裕之としている。

編集委員会では五ページの正誤表をつくったが、そこには「記事の誤り」との指摘が三回でている。こまかく点検していけば、単なる誤植でなくて「記事の誤り」とするべき箇所がほかにもみつかるかもしれない。

このように、この記念誌の欠点をあげつらってはみたが、波瀾にとんだ学会の一〇〇年の歩みをみるに不可欠の資料であることは、もちろんである。しかも、その波瀾は世の動きにつれてわきあがったものであって、この一〇〇年史は日本社会史の一断面ともなっている。残念ながら、日本精神神経学会会員に歴史への関心はうすく、購読者は会員数の数パーセントにとどまっている。

なにしろ大册である。読者はまず、概説にあたる「沿革―日本精神神経学会の歴史―」をよみ、ついで座談会「学会の一〇〇年、そしてこれから」をよみ、あとは関心ある部分にすすまれるのがよいだろう。一五編からなる「トピックス」の部分にもおもしろい記事がある。岡田・小峯が第一〇三回日本医史学会で発表した「製本おそるべし―『神経学雑誌』のばあい―」も、「トピックス」におさめられている。

なお、日本医史学会会員では、小峯和茂、昼田源四郎、松下正明および岡田が、この編集委員として参加していた。また、今回はじめてあきらかにされた重要事実のいくつかは、小峰研究所に蔵されていた未製本の『神経学雑誌』によるものであった（この点は、岡田・小峯が「製本おそるべし」にのべた）。

（岡田　靖雄）

〔日本精神神経学会、東京都文京区本郷五―二五―一八ハイテク本郷ビル内、電話〇三―三八一四―二九九一、二〇〇三年五月一五日、B五判、本編八九二頁、資料編三六八頁＋CD-ROM一枚、送料とも一五、〇〇〇円〕

吉元　昭治　著

## 『日本全国神話伝説道指南』

本書は口絵に評者も関心をもって収集している全国の多くの絵馬がカラーで七頁も載せられ、多くの写真・図版と共に神話伝説、歴史、民俗学、医史学と広範囲にわたる豊富な内容が伝承地という視点から記された総五六〇頁の大著であ